様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６０４

研究課題名（和文）フランス現象学運動における患者と子どもの位相に関する研究

研究課題名（英文）Research into the position of patients and children in French phenomenological movements

研究代表者
澤田　哲生（Sawada, Tetsuo）

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：６０７１０１６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　「フランス現象学運動における患者と子どもの位相に関する研究」が本研究課題である。このテーマの下、本研究は、フランスの現象学者（モーリス・メルロ＝ポンティとマルク・リシール）による病理的現象と子どもの行動に対するアプローチの方法、その意義と可能性を研究目的とした。
　この研究目的をスムーズに達成するために、本研究は、次の三点を研究内容として、研究を遂行した。(1) メルロ＝ポンティによる発達心理学に対するアプローチの検証。(2) リシールによる精神病理学へのアプローチの検証。(3) (1)と(2)の成果をとおした、現象学的なアプローチの思想史における意味と意義の検証。

研究成果の概要（英文）：　Under the research program entitled "Research into the position of patients and children in French phenomenological movements", we studied French phenomenologist's (Maurice Merleau-Ponty and Marc Richir) approach to pathological phenomena and children's behavior.
　In order to advance the purpose of that research program, we accomplished the following contents of research; 1) firstly, Merleau-Ponty's phenomenological approach to developmental psychology ; 2) secondly, Richir's phenomenological approach to psychopathological phenomena ; 3) finally, examination of sense and value of their phenomenological approaches in the history of philosophy.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：現象学　メルロ＝ポンティ　リシール　発達心理学　精神病理学　知覚　空想　想像

１．研究開始当初の背景

（１）現象学と人間科学

本研究の学術的背景を、哲学史および思想史の観点から説明したい。現象学は、数学者・哲学者のエトムント・フッサール（Edmund Husserl, 1859-1938）により、19 世紀末に創設された。現象学の当初の目的は、諸学問の根拠の探究であった。しかし 1920 年代に入ると、フッサールは、著作あるいは草稿のなかで、子どもの行動や非健常な主体の生を頻繁に論じるようになる（フッサール全集：Hua. XIII, XIV, XV）。さらにルートヴィッヒ・ビンスヴァンガーらの精神科医たちが、フッサールの現象学を、精神疾患の分析と治療に取り入れるようになり（『現象学的人間学』、1947 年）、考察対象の幅が子どもや患者にまで広がった。厳密な学としての現象学は、以上の経緯から、非健常あるいは未熟とみなされる生の考察を射程におさめるようになった。つまり人間学的な方向へと移行していったのである。

（２）フランス現象学運動

第二次世界大戦後に、フッサールの現象学はフランスに大々的に導入された。そのなかで、現象学の人間学的な方向性は幅広く発展した。フッサール現象学をフランスに導入した最初の世代に属するモーリス・メルロ=ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）は、『行動の構造』（1942 年）と『知覚の現象学』（1945 年）のなかで、ドイツ語圏で分析された数多くの症例を参照し、そこから独自の現象学を構築した。さらに 1949 年から 52 年に開講されたソルボンヌ大学の講義（『意識と言語の獲得　ソルボンヌ講義録』）では、フランスの児童心理学（ジャン・ピアジェ、アンリ・ワロン、等々）や児童絵画の分析（アンリ・リュケ、ゾフィー・モルゲンシュテルン、等々）の成果を援用して、自らの現象学を発展させた。

メルロ=ポンティ以後も、現象学の人間学的な方向性は継続的に研究されている。その代表となる哲学者が、マルク・リシール（Marc Richir, 1943-2015）である。2004 年に出版された『空想、想像、情動性（*Phantasia, imagination, affectivité*）』のなかで、彼は、精神病理学および精神分析の領域で分析された精神疾患（神経症、倒錯、精神病〔躁鬱、メランコリー、統合失調症〕）を現象学の視点から考察することで、非健常な場面に固有の現象学の諸概念（ファントム身体、疑似的根源性、等々）を構築した。また同じ著作のなかで、リシールは、イギリスの精神分析家ドナルド・ウィニコットの母子関係論（『遊ぶことと現実』、1971 年）における乳幼児の「移行対象」という概念に注目することで、フッサール現象学における「空想（Phantasie）」という概念の新しい側面を提示した。以上の哲学史および思想史の潮流、そしてその人間学的方向性が、本研究を開始するにあたっての学術的な背景であった。

２．研究の目的

本研究は、＜フランス現象学運動における患者と子どもの位相に関する研究＞というテーマの下、フランス語圏出身の現象学者、モーリス・メルロ=ポンティとマルク・リシールの患者と子どもの行動と表現に対するアプローチを考察する。患者と子どもは、哲学・思想史において非健常あるいは未熟とみなされてきた。こうした伝統を批判しつつ、上記の二人の現象学者は、子どもの表現行為や患者の非定型の行動を自らの哲学研究に有機的に採り入れることで、独自の現象学を構築した。二人の現象学者の患者と子どもに対する現象学的アプローチを考察することで、現象学における患者と子どもの位相と意義を導出し、そこから哲学・思想史における両主体（患者と子ども）の可能性を提示することが、本研究の目的であった。

３．研究の方法

本研究は、次の三点の研究テーマから構成された。A．まず、現象学者たち（メルロ=ポンティとリシール）は、患者と子どもの行動と表現を、どのように分析・議論したか。B．患者と子どもの行動と表現の分析は、現象学にとってどのような意義があるのか。C．最後に、現象学者による患者と子どもの行動と表現の分析は、哲学・思想史的にとって、どのような可能性があるのか。本研究においては、A と B が解決すべき主要な研究テーマである。C は、A と B の成果の学術的な正当性を、哲学史の視点から客観的に裏付けるために設定された。以上の三点のテーマは、以下の手順で研究が進められた。

（1）メルロ＝ポンティの発達心理学へのアプローチ

メルロ=ポンティの現象学における病理的現象の意義については、平成 24 年度に単著書でその概要を提示した。しかし、彼が子どもの行動と表現について重点的に論じた『ソルボンヌ講義録』は、まだ十分に研究が進められていなかった。また先行研究も依然として少ない状況であった。したがって、本研究では、『ソルボンヌ講義録』で参照される著者（ジャン・ピアジェ、アンリ・ワロン、等々）と著作、これらに対するメルロ=ポンティの解釈を検討し、現象学運動における子どもの役割を考察した。そして、その成果をメルロ=ポンティの病理論にフィードバックすることで、現象学における患者と子どもの重要性を明らかにした。

（2）リシールによる病理的な現象へのアプローチ

リシールの現象学における病理的現象の位相に関して、神経症と倒錯に対する彼のアプローチはすでに研究が完了していた。しかし、本研究の開始にあたり、精神病圏に分類される精神疾患（統合失調症、躁鬱、メランコリー、等々）に対するリシールのアプローチは、まだ十分に研究が進められていなかった。子どもの行動（とりわけウィニコット『遊ぶことと現実』）に対するアプローチに関しても同様である。また先行文献は、リシールの現象学そのものを論じた研究が多く（R. Alexandre, *Phénoménologie de l'espace-temps chez Marc Richir*, 2013）、本研究に関わる先行研究も存在していない状態であった。したがって、リシールによる精神病に対するアプローチと子どもの行動の分析の位相を考察することで、現象学的人間学における両主体の重要性を明らかにした。

（3）研究のまとめ：（1）と（2）の総合

（1）と（2）の成果を通して、哲学・思想史における患者と子どもの重要性について考察した。哲学・思想史のなかで、患者と子どもは、非健常あるいは未熟な存在と定義されてきた。これに対して、現象学者たちは、患者と子どもの行動と、その分析にある一定の意義を見出した。メルロ＝ポンティとリシールの議論によると、発達心理学と精神病理学の研究成果を検討することにより、健常な大人の主体のなかに感知されないまま残存する脆さや退行の可能性を確認することが可能となる。メルロ＝ポンティは、これを「自己愛」への退行と記述し、リシールは人間の「機械装置」への変形と記述した。こうした主体の変容という共通の観点が引き出されたことで、上記の（1）と（2）が総合された。

４．研究成果

（1）平成 27 年度：資料の収集と精査

本研究の初年度である平成 27 年度は、資料の収集と精査を主に行った。メルロ＝ポンティに関しては、彼が参照した発達心理学関連の著作と論文を収集・精査し、彼の現象学における位相を検証した。リシールに関して

は、彼が参照した精神病理学関連の資料を収集・精査し、彼の現象学における精神病理の位相を検討した。

年度の後半には、上記の作業のなかで発表可能なものを、論文、学会、シンポジウムなどで発表した。下記５の「雑誌論文」⑤、⑥、⑦、「学会発表」⑧と⑨が、この研究成果である。

（２）平成 28 年度：前年度の研究作業の発表と公刊

平成 28 年度は、前年の資料の精査の成果を学会、シンポジウムで発表することで、本研究の妥当性について、各分野の専門家と意見交換を行った。主な研究生は、下記「雑誌論文」③と④、「学会発表」④、⑤、⑥、⑦、「図書」⑤である。

とりわけ、海外（ベルギー、カナダ、ロシア）で論文公刊（「雑誌論文」④）と研究発表（「学会発表」④、⑤、⑦）を行い、当地の研究者たちと意見交換を行うことにより、研究の妥当性のみならず国際的な水準も確保された。

平成 27 年度と平成 28 年度の両年度の研究活動により、上記「研究方法」における研究活動（１）と（２）が 80%程度まで完成した。

（３）平成 29 年度：研究の総括

本研究の最終年度である平成 29 年度は、上記の研究活動（１）と（２）を完成させ、研究の総括を行った。

（１）と（２）の完成を示す研究成果は、下記「雑誌論文」①、②、③、「学会発表」②と③、「図書」①である。この研究成果により、上記（１）と（２）が完成した。そこから、上記に記したとおり、メルロ＝ポンティにおいては「自己愛（ナルシシズム）」の問題が、リシールにおいては「機械化」の問題が引き出された。

さらに研究の総括にあたり、本研究の成果を、共著書として、一般向けに公刊した。その成果が、「図書」②、③、④である。これにより、上記（１）と（２）が総合され、本研究の総括がなされた。各著書においては（とりわけ「図書」③）、健常な大人の生活に感知されないまま残存する幼児性、退行や病理への移行の可能性が、一般向けの用語で説明された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 澤田　哲生、「自己認識と対人関係のはじまりについての現象学的考察――メルロ＝ポンティ「幼児の対人関係」講義における情動性を手がかりとして」、『文化と哲学』、査読有、第 35 号、2018 年 11 月公刊予定

② 澤田　哲生、「メルロ＝ポンティとワロン――超-事物をめぐって」、『メルロ＝ポンティ研究』、査読有、第 21 号、日本メルロ＝ポンティ・サークル編、2017 年 11 月

③ Tetsuo Sawada 、《 Liberté et institution : Sur la phénoménologie de l'*Einbildungskraft* dans la pensée de Marc Richir 》, *Bulletin d'analyse phénoménologique*, 査読有、n°2, Université de Liège, pp. 525-544, mars 2017

④ 澤田　哲生、《 Pseudo-idéalisme et sublime négatif. Sur le rationalisme morbide de la psychose 》, *Annales de phénoménologie*, 査読有、n°15, Association pour la promotion de la phénoménologie, pp. 199-220, juin 2016

⑤ 澤田　哲生、「メルロ＝ポンティと精神分析――性とエディプスコンプレックスの批判をめぐって――」、『実存思想論集』、査読有、第 XXXI 号、実存思想協会編、pp. 81-100, 2016 年 6 月

⑥ 澤田　哲生、《 Du somatique au corps vivant – sur le cas de Dora dans les Notes de Cours de M. Merleau-Ponty 》, 『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 64 号、富山大学人文学部編、pp. 23-38, 2016 年 2 月

⑦ 澤田　哲生、「ほつれと浸食――後期メルロ＝ポンティの思索のはじまりと展開について――」、『メルロ＝ポンティ研究』、査読有、第 19 号、日本メルロ＝ポンティ・サークル編、pp. 85-97, 2015 年 9 月

〔学会発表〕（計９件）

① 澤田　哲生、「西欧近代思想のなかの精神病理」、富山大学人文学部第四回「人文知コレギウム」、富山大学、2017 年 11 月 22 日

② 澤田　哲生、「自己認識と対人関係の始まりについて――メルロ＝ポンティ「幼児の対人関係」講義における情動性の役割について」、静岡哲学会第 40 回大会、静岡大学、2017 年 11 月 3 日

③ 澤田　哲生、「メルロ＝ポンティとクライン：攻撃／不安、取入れ／投影をめぐって」、精神分析的心理療法フォーラム第 6 回大会、大阪経済大学、2017 年 7 月 1 日

④ Tetsuo Sawada, 《 Événement dans les phénomènes de *phantasia*: autour de la nouvelle fondation de la phénoménologie chez Marc Richir 》, "From Being to Event: the Trends in Postmetaphysical Thinking", Philosophy Department, Institute for History and Archives, Russian State University for the Humanities (Moscow, Russia), 2017 年 3 月 30 日

⑤ Tetsuo Sawada, 《 Phénomènes, institution et leur dissociation : sur la pathogenèse transcendantale dans la pensée phénoménologique de Marc Richir 》, Marc Richir : Phénoménologie, esthétique et politique, 4e journée du Laboratoire de philosophie continentale, l'Université Laval (Canada), 2016 年 9 月 30 日

⑥ 澤田　哲生、「メルロ＝ポンティとワロン超－事物をめぐって」、日本メルロ＝ポンティ・サークル第 22 回大会、日本大学、2016 年 9 月 11 日

⑦ Tetsuo Sawada, 《 La phénoménologie de l'*Einbildungskraft* dans la pensée de Marc Richir 》, L'acte d'imagination : Approches phénoménologiques, 10e séminaire annuel de l'Unité de recherche "Phénoménologies" à l'Université de Liège, 2016 年 4 月 26 日

⑧ Tetsuo Sawada, "Phantasy and Vulnerability in Children's Drawing: Starting from Merleau-Ponty's Sorbonne Lectures 1949-1952", Finnish-Japanese Research Collaboration : International Symposium "Phenomenology of Vulnerability and Limits", Osaka University, 2016 年 3 月 2 日

⑨ 澤田　哲生、「自由と眩暈　『弁証法の冒険』から『弁証法的理性批判』へ」、サルトル研究会ワークショップ「『弁証法的理性批判』刊行 55 周年――その多面的可能性を切

り拓く」、立教大学、2015 年 12 月 5 日

〔図書〕（計５件）

① Tetsuo Sawada, 《 Du sublime à l'illusion transcendantale : sur la pathogenèse transcendantale chez Marc Richir 》, *Collectifs sur Marc Richir* (titre provisoire), Hermann, à paraître en 2018 (2018 年公刊予定)

② 澤田　哲生　他、桂書房、『人文知のカレイドスコープ』、2018 年 3 月、pp. 72-81

③ 澤田　哲生　他、法政大学出版局、『メルロ＝ポンティ読本』、2018 年 3 月、pp. 232-243, pp. 292-299, pp. 336-343

④ 澤田　哲生　他、白水社、『メルロ＝ポンティ哲学者事典』（別巻）、2017 年 11 月、pp. 471-472

⑤ 澤田　哲生　他、『メルロ＝ポンティ哲学者事典』（第三巻）、白水社、2017 年 2 月、pp. 125-129, pp. 286-304, pp. 305-309

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
無し

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　哲生（SAWADA　Tetsuo）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：60710168

(2)研究分担者
無し
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
無し
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
無し
（　　）